

# 高校生の共同作文編集における学び合いの研究

片桐 史裕（新潟県立高田商業高等学校）

## 要約

本研究では、互いにアドバイスし合い、具体的に読み手を意識して文章を作成することは、作文活動において有効なことを明らかにすることが目的である。そこで高等学校の国語表現の時間に共同で作文を編集する授業を行い、そこでの調査結果をもとに研究を進めている。

1次調査では、高等学校3クラスに作文に関する意識調査を質問紙法で行った。そこから、作文の種類や、アドバイスされる相手によって抵抗感が違うという結果が出た。そのことから作文指導において、読み手を意識した指導がなされていないという状況が見えてきた。

2次調査では、授業を継続的にVTRとテープレコーダーで記録し、話し合いの中で、作文テーマ決定、推敲、表現がどのようになされているかを分析し、人に伝えるためには何が必要かを模索する生徒の姿が見えた。

**キーワード：**国語表現 作文 共同 編集 他者意識 相互評価

## 問題の所在

### これまでの作文指導

これまでの作文指導は「文章を整える」ということに重きが置かれていた。作文指導に関する文献を調べても、ほとんどの場合、教師はどのような文章をどのように添削すればよいのかというものである。つまり「個」対「個」の指導であった。希に集団で作文を指導する事例が紹介されていたとしても、それは教師から見てよい作文を例にとり、生徒たちに紹介し、「このように書けばいいのだ」というお手本を使って集団指導がなされているだけであり、生徒同士の交流によって作文指導はなされていない。生徒同士による共同批評作業はあるようだが、単に誤字・脱字・語句の使い方の指摘に留まり、作文の内容にまで踏み込んで意見を言い合う活動に至っていない。

そうなると学校では教師に読ませるためだけに作文を書くことになってしまう。教師が書いた作文を「発表する」と言うと生徒から強い非難を浴びることが多く、クラスメイトに作文内容を知られる抵抗感が強いことが伺える。これは、教師以外に読ませる文章を書く機会が少ないからであると考えられる。このように読み手が教師のみの文章を書き続けることになると、教師に気に入られるためだけの文章を書くようになる。

しかし教師が気に入った文章が良い文章かどうかはかなり怪しい。多くの国語教師の文章を読んでも、ほかの教科の教師と比べて「特別に」優れた文章を書いている人は少ない。時には、「難解な」文章を書く国語教師もいる。文章力のあまりない国語教師が認める文章が「よい文章」「わかりやすい文章」とは必ずしも言えない。

### 教師対象の文章の弊害

文章を読ませる相手が教師のみだと、生徒の中では教師にその課題を出したか出さないかが問題になる。内容は別で、提出すればよいという考えが生まれてくる。評価基準が教師の側だけにあるので、「何枚書けばいいの?」「書き出しはどうすればよいの?」と質問し、教師の価値に合わせようとする。そして多くの場合、生徒は誤字脱字・文章のねじれなどのチェックをそれほどせずに提出する。見落としがあったとしても教師が直してくれるからだ。生徒の中では「人に読んでもらう文章を書く」という意識が薄い。

教師主導の作文指導はほとんどの場合「文章の型」に当てはめて指導する。教師が用意した「正しい」「美しい」とされる型（起承転結・接続詞・句読点の位置など）に子どもの文章を当てはめることの指導が多い。しかし、どうしてその文章が「良い文章」なのかの論理的説明もなされず経験則で指導される。その型に当てはめて作った文章が「良い文章になった」ということを体感させることも少ない。結局生徒に「教師の言った通りに文章を書けば評価が高い」という意識を植え付けられることになる。

### 個の作業から他者との作業へ

作文指導は生徒対教師の個対個の関係の作業であるべきだと考えられている。個人の意見や感想を1人でまとめ、文字を並べる。それを教師が直す。しかし、職業作家が作品を創出する時に行われているのは、作家対編集部という個対集団の関係の作業だ。このことから、教室での作文指導も伝わる文章を作るには、複数の人間（身近な仲間）でアドバイスし合った方がいいのではないかと仮定するようになった。

### 読み手を具体的に意識

このように仲間同士で評価し合うことになると、「下手な文章は書けない。」という意識が生まれる。また、仲間に認めてもらうことが作文の評価になるので、読み手を具体的に意識し、「どんな文章を書けば伝わるのか」ということを常に意識して作文するようになる。

## 本研究の目標

以上の点をふまえ、本研究では文章表現の原点、「情報を伝えること」に立ち戻って言語表現活動を行う重要性を明らかにしたい。つまり、

常に伝達対象の他者を意識させる。

伝える対象（身近な仲間）からのフィードバックをもらいながら文章を作る。

伝わる文章とはどのような文章か？ということを生徒同士が探る。

という3点に着目した授業から、より良い言語表現活動の形態を探りたい。くわえて、個の表現方法である作文に他者がどのように影響していくのか、また、他者に埋没せずに残る「個」の存在を明らかにしたい。

## 方法

### (1) 1次調査

調査時期 2002年7月

アンケートの対象者 新潟県内A高校2年普通科文系1クラス2年普通科理系1クラス

新潟県内B高校1年被服科1クラス

総計236名

### アンケート内容

韻文（詩、短歌、俳句など）・生活文（「夏休みの思い出」など）・小論文、それぞれにおいて、「書くこと」「友人に見せること」「友人からアドバイスをもらうこと」に抵抗があるかないかを問い、理由を書いてもらった。

### (2) 2次調査

調査時期 2002年9月～10月

調査対象 新潟県内C高校3年選択国語表現選択者17名

授業内容 1時間目～4時間目 共同作文編集作業

5時間目 クラス全員による相互評価

課題 仲間を「感動させる文」

評価方法 講座生徒全員に作文を巡回させて、4段階で評価し、コメントを書く。

### 「感動」について

課題を「感動させる文」としたのは、「感動」というのは、各々の主観によって判断できるものであり、読解や評価に特別な知識・技能が必要ないものであるからである。自分の感覚をもとに読解・評価できるものだからである。

そして、少なくとも文章表現内容が伝わらなければ「感動」は生まれにくいはずである。さらに伝える対象が同年代であれば感覚が似通い、ある程度「感動」するテーマに推測がつくと考えたからである。

よって本研究は「感動させる文章を書けるようになる」ということや、「感動とは何か」を明らかにすることが目的ではない。読み手を明示することや、作文を共同編集することによって、作文指導への効果を明らかにすることである。

とはいっても「感動とは何か？」ということは深い命題である。良い文章というのは多かれ少なかれ「感動」があるはずだ。それが連絡文でも、修士論文でも。感動無くして伝達はあり得ない。「感動」という意味を「心の震え」「心の動き」ととると、本研究で扱っている「感動」の意味が捉えやすいかもしれない。

## 研究の成果

### (1) 1次調査 アンケートの結果からの考察

#### 生活文を編集することへの抵抗が強い

図1のグラフは作文全体（韻文・生活文・小論文）の集計である。これを見ると「作文を見せること」>「作文を作成すること」>「編集すること」の順で抵抗感が弱くなっていることがわかる。しかし、図2のように作文の種類別に見ると生活文だけが編集をする場合抵抗感が強くなっている。

学校の作文活動（国語の授業以外も含める）では、生活文作成が最も多くを占めている。しかしそれを他人に見せてアドバイスをもらうことの抵抗が一番強い。

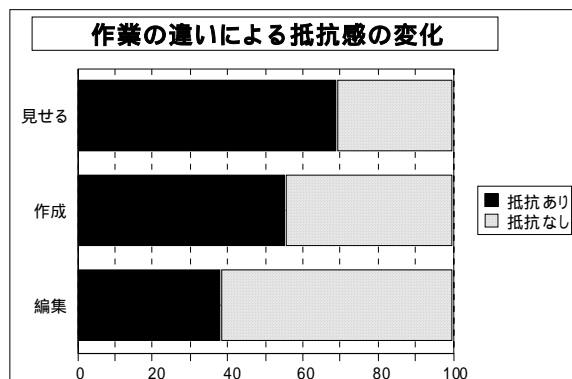


図1 作業と抵抗感の関係

ここにはスペースの都合であげられないが、生活文編集の抵抗感の理由で多くを占めているのが、「自分の文章ではなくなる」・「自分の作文だからアドバイスは無理だ」ということである。この回答はアドバイスを受けてそう思ったということではなく、アドバイスを受けたことが無く、推測で言っているものと思われる。(アドバイスを受けながら生活文を書くという作文指導は私が調べた限り皆無である。)いわゆる「食わず嫌い」と言える。生活文を最も多く書きながらアドバイスを受けていないという「書きっぱなし」の状況が伺える。「問題の所在」でも述べたようにそのことからくる弊害が生徒の言語表現活動に現れている。

## (2) 2次調査で見えた生徒の意識 「伝える」という意識の薄さ

授業当初、「感動したこと」を作文に書くことと、「感動させる」作文を書くことの頭の切り替えがなかなかできない。( 会話 ) 生徒は教師の「価値」を探っていることがわかる。

### 「伝えるためには『1次情報(本人が採取した情報)』が有効である」との意識

生徒は話し合いの中で、体験的に1次情報の方が伝えたいことが伝わるということを再認識した。( 会話 ) また、表現メディアを変換することにより、感動が薄れるということも再認識している。( 会話 ) そしてそのことは作文の内容にも反映され、1次情報作文がこの授業の前後で増えていることがわかる。( 表1 ) これは、話し合いが作文の内容に影響していると判断することができる。

表1 抽出生徒9名\*1)の作文の内容変化

	1次情報作文	2次情報作文
単元前の作文(02/06)	1編	8編
本単元の課題(02/10)	7編	2編

### 1次情報作文と2次情報作文への評価の差

生徒同士の相互評価の結果は、1次情報作文への評価の方が平均して高かった。( 表2 )

表2 相互評価の結果(全17名分)

	1次情報作文	2次情報作文
作品数	11	6
獲得点数平均	51.5	46.0

( 相互評価は1人最高4点で全員の作文を評価。合計すると最高で64点獲得することができる。)

文章の種類と作業による抵抗感の変化

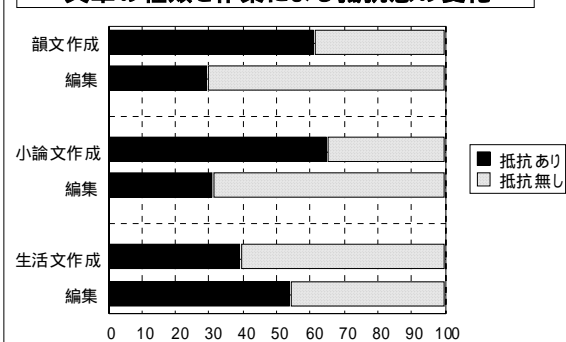


図2 文章の種類と抵抗感の違い

### 【会話 1班(第1時)】

- (131)感動したことを書くんですか?  
 (132)【教師】うん。感動させることを書くの。  
 (133)自分の感動したことを相手に伝えるってこと?  
 (134)伝えられねーよ。  
 (135)自分テレビ見てさあ、作られた感動しか知らないよ。  
 (136)わたし与えられた身だもん。  
 (137)そうだよ。  
 (138)受け身だよ。  
 (139)【教師】テレビだって感動して泣くし、マンガ読んで泣いてたもん。  
 (140)そういうのもいいんですか?  
 (141)【教師】自分の感動があるんでしょう?  
 (142)うん。  
 (143)【教師】それを文章にして伝えられればいいわけでしょう?  
 (144)うん。  
 (145)だって内容が……。  
 (146)【教師】内容は関係ないじゃん。  
 (147)自分が感動したことを、相手にも感動させるように伝えるように書くんですよ。  
 (148)【教師】そうそう。  
 (149)どうやって書くんだよ。

### 【会話 4班(第1時)】

- (029)感動させる。  
 (030)感動のこと書かなくてもいいんだ。  
 (031)みたいだね。  
 (032)がんばろ。  
 (033)感動してくださいにする? 題名。  
 (034)感動だけでいいよ。  
 (035)「感動したこと」じゃないじゃん。  
 (036)ねえ。  
 (037)それじゃあなにを書けばいいの?  
 (038)感動することじゃないの?  
 (039)「グリーンマイル」みたいなことを書け。  
 (040)うん。  
 (041)実体験の方がいいんじゃない?  
 (042)えー。  
 (043)例えば、  
 (044)何か、助けてもらって、  
 (045)あー。  
 (046)恥ずかしいね。見られるの。  
 (047)さすが、隊長。  
 (048)部活のこと書けばいいじゃない?  
 (049)うん。  
 (050)ないよー。  
 (051)ヒントは?  
 (052)これは私が小5の時に体験したことです。

\*1)単元前の作文で、手に入るものが9人分だったので、その生徒の授業前・授業の課題の作文内容を比較した。

生徒たちには、共同作文編集により「1次情報の方が感動を伝えられる」と認識され、それをもとに書かれた作文の方が読み手に感動を呼び起こしていることが言える。また、本人の獲得した1次情報を文字言語というメディアに変換したとしても、2次情報を変換するよりも1次情報からの情報劣化が少ないということ編集会議によって認識し、作文に生かしている。

### 編集会議の必要性の認識

生徒は、最初は編集会議について必要を感じていなかった(会話)が、回を重ねることにより、必要性を感じる会話をしている。生徒の文章作成に影響を与えていることが伺える。

### まとめ

共同作文編集の有効性があるということが見えてきた。

生徒は共同作文編集を受け入れる姿勢に変わってきた。

話し合いによって構想を練ることで、最初は漠然としたテーマだったが、徐々に具体的なイメージを形作って作文作業に取りかかる者がいた。具体的には

1次情報の方が「感動させることができる」

メディアが変換されることによって感動が薄れていくということを話し合いの中から出してきたことである。つまり、「感動」を呼び起こすにはその人特有の情報(体験)が一番いいという結論である。これこそ周りに埋没しない「個」と言えるのではないかと

また、1次情報作文に対する評価も2次情報作文よりも高かった。

疑問に思ったこと(伝わるか、伝わらないか)をすぐに他人に聞けることで、編集作業がスムーズになる。

表現したいことを言葉に出し、周りに同意してもらうことにより、自信を持って書けるようになっていっているのではないかと

### 2次調査に向けて今後の課題

文章変化の過程分析

個のみで作成された文章が話し合いの中のアドバイスでどのように文章が変わっていくかを詳しく見たい。

人に入り込む言葉と遠慮する言葉についての分析

その作文の「核(テーマ・主題)」に迫る言葉、「外周(表現・文字・文法等)」に迫る言葉によって、表現がどのように変わるのかを分析したい。

### 資料 1次情報作文と2次情報作文の例(課題作文)

#### 【1次情報作文の例】

バイト先での事、小さな子どもが迷子になって目に涙をためて「お母さん」を探していた。小さな体にたくさんの不安を抱えた子どもがいた。私は、その子の手をとって一緒にお母さんを待った。小さな手が震えていたのを覚えている。私は、その時自分の小さな頃の映像が脳裏に浮かんだ。幼い頃私はよくお店で迷子になった。ふと、母の存在が消えた事に気づき、頭の中は真っ白になった。その時、急に周りが雑音となり人の足音が頭の奥まで突いてきて恐くなった。もし、このまま迎えが来なくて一人ぼっちになったらどうしよう、と小さな胸で悩んでいた。と、そのような事を思い出しながら迷子の子の手を繋ぎ待っていた。そして、その子のは母が来て子どもを抱き締めた。そんな光景を眺めながら私は胸があつく感じた。私は、迷子の子の気持ちがよくわかる。私は、店での迷子はさすがになくなったが、心の迷いが襲ってくることもある。小さな頃と高校生の頃に襲ってくる迷子は別々だが、不安や絶望は一緒なのだ。今、小さな頃と重なる場面をみて、自分が成長したことを実感する。いつか、自分がもっと成長した時に高校生の頃と重なる場面を見て私はこう思うだろう。「成長したなあ」

#### 【会話 1班(第2時)】

- (067)自分の感じたことを書く。感動したこと。
- (068)感動したことこの前からずっと考えているんだけど思い出せないんだよね。
- (069)ウオーターボーイズのダンス見て感動した。
- (070)あー。
- (071)感動したことを、さらに、人に伝えるんだ。
- (072)うん。
- (073)自分がテレビ見て感動したことをその感動を、自分のことを感動してもらいたいこと?
- (074)それはむしろかしいよ。
- (075)それはさ、同じテレビ見りゃ感動できるよ。
- (076)それを取って言葉で伝えることがさあ。
- (077)文章にしようって言うてるんだ
- (078)それを、それがテーマだよ。今。

#### 【会話 4班(第2時)】

- (057)だって、かえってすることもなくない?
- (058)なに?
- (059)直す文もないし。わたしの字が汚いってことぐらい。
- (060)わからない
- (061)感動?
- (062)愛ちゃんの字すき
- (063)読みづらいよね
- (064)いいじゃん愛ちゃん
- (065)かわいいよね
- (066)も愛だしね
- (067)はははは
- (068)きちゃんない
- (069)全然全然
- (070)きれいだよ
- (071)編集会議ってすることないよね。

#### 【会話 4班(第4時)】

- (007)社長、見てください。編集部長、みて。
- (008)はい社長、これは読んだ
- (009)これ、点いる、いらない?
- (010)どこどこ?
- (011)「ばかりいた。」ずっと点なしでいく?
- (012)あ、ほんとだ。
- (013)「楽しくて」「て」で「、」いるかね?
- (014).....
- (015)「なって」で「、」いるか。
- (016)うん
- (017)「とても楽しくて笑ってばかりいる毎日でした」の方がいいよね。
- (116)全然さ、違うんだけどいいかな?
- (117)わたしも全然変わる
- (118)変えながら書いてる
- (119)こっちの方がいい文になるような気がする
- (120)先生なんいていらなくなって
- (121)かぎってどこに?き

#### 【2次情報作文の例】

最近、死について簡単に考えている人が多いのではないだろうか。嫌いな人は殺せばいい、人生につかれたら死ねばいい。人生をリセットするのに死を選ぶのは一番安易な方法かもしれない。いつだったか、母とテレビを見ていた。親にしてられた子どもが親を憎み、親を殺したいと切に願っていた。子どもは親を選べない。どうして自分を産んだのか責めたくなる日もあるだろう。親に「産まなければ良かった。」と言われたことがある人はいらるだろうか。実際に言われたら、辛いだろうけど、その言葉の裏に隠された真意があると思う。本当は子どものことが大好きで、大切にたまらないのだ。「産まなければ良かった。」の裏には「生まれてきてくれてアリガトウ。」がああ隠されているんだ。だから、「産んでくれてアリガトウ。」と言える人になりたい。なってほしい。

ご意見・ご感想は niagara@cocoa.ocn.ne.jp へ。